

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 サワラ

学名 *Scomberomorus niphonius*

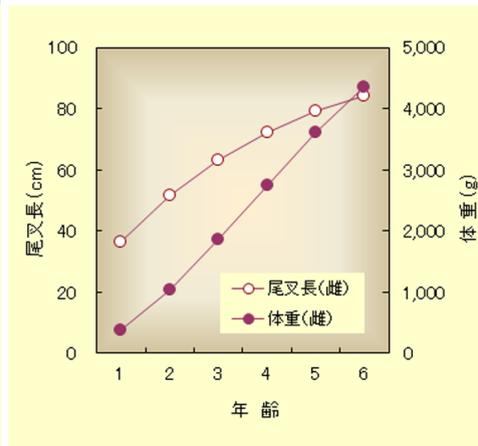
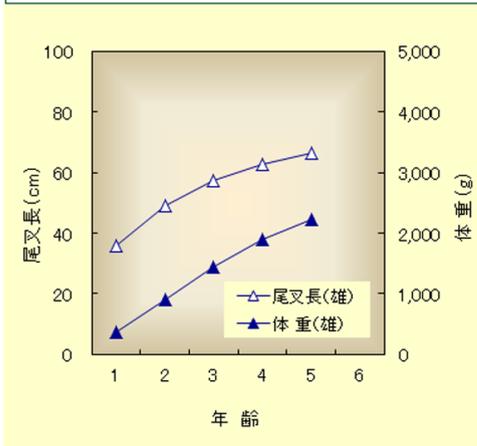
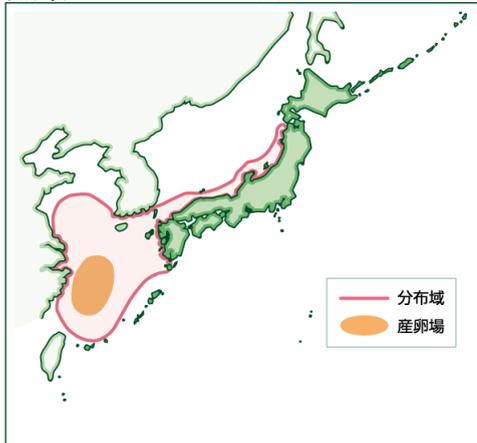
系群名 東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 約6歳
成熟開始年齢: 1歳(一部)、2歳(大部分)
産卵期・産卵場: 3～6月に産卵、産卵場は東シナ海の中央部～中国沿岸
索餌期・索餌場: 夏～秋季、黄海・渤海、日本海など
食性: 稚魚期以降に魚食性
捕食者: 不明

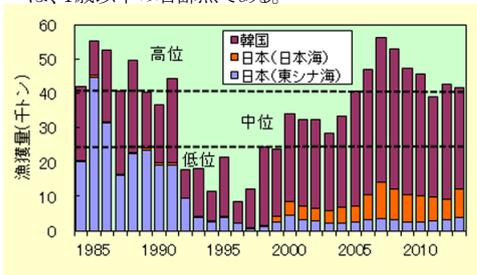


漁業の特徴

1990年代半ばまで、サワラ東シナ海系群の日本の漁獲量の大半は、東シナ海の大中型まき網によるものであった。しかし2000年以降では、本系群の漁獲量全体に占める東シナ海の大中型まき網による漁獲量の割合は低下し、日本海での定置網による漁獲量の割合が増加している。日本海における漁獲量が全体に占める割合は、2003年以降は60%以上である。

漁獲の動向

日本の漁獲量は1984～1991年には2万トン前後で推移していたが、1992年以降に急減して、1997年には822トンまで落ち込んだ。1998年以降は、日本海における漁獲量が増加し、2013年における日本の漁獲量は、2000年以後で2番目に高い12,234トンであった。韓国の漁獲量は、2007年に過去最高の42,199トンに達したが、その後減少傾向に転じ、2013年には29,394トンであった。東シナ海における大中型まき網や日本海における定置網の漁獲物の大半は、1歳以下の若齢魚である。



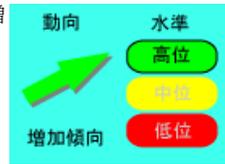
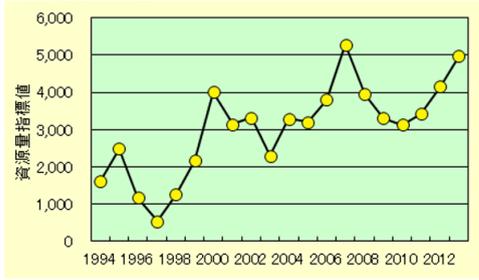
資源評価法

日本の漁獲量、東シナ海で操業する日本の大中型まき網のCPUE(漁獲量/有効努力量)、および韓国の漁獲量の相乗平均値を、資源量の増減を示す資源量指標値と考え、これらの情報に基づいて資源評価を行った。

資源状態

2013年におけるサワラ東シナ海系群の資源水準は、過去30年間(1984～2013年)における日本と韓国の合計漁獲量の最少値と最大値の間を三等分した基準値に基づいて、高位と判断した。また、最近5年間(2009～2013年)にお

ける資源量指標値は、2010年を境に減少傾向から増加傾向に転じたため、資源動向は増加と判断した。



管理方策

資源水準が高位にあり、資源動向が増加であるため、資源状態に合わせて漁獲することが妥当である。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	145百トン	$1.0 \cdot C_{2013} \cdot 1.19$	—	—
ABCtarget	116百トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot C_{2013} \cdot 1.19$	—	—

- 日本漁業に対する値
- ABC算定規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot C_t \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/D)$ で計算し、 k は係数(標準値の1.0)、 b は資源量指標値の傾き、 D は平均値(直近3年間)である
- δ_1 は高位水準の標準値(1.0)を使用した

資源評価のまとめ

- 日本の漁獲量、大中型まき網のCPUEおよび韓国の漁獲量の相乗平均値を資源量指標値として、資源評価を行った
- 資源水準・動向は高位・増加
- 漁獲の主体は1歳以下の若齢魚

管理方策のまとめ

- 資源水準・動向は高位・増加であるため、資源状態に合わせて漁獲することが妥当
- 東シナ海および日本海における資源状態の正確な把握や資源管理には、関係国間の協力が必要である

執筆者: 高橋素光・青沼佳方・由上龍嗣

資源評価は毎年更新されます。